

新人大図鑑 2023

令和5年5月20日発行（毎月1回20日発行）
第42巻第5号 通巻496号
昭和57年6月9日第三種郵便物認可

美術の窓

5

May
2023
No.476

THE WINDOW OF ARTS



全国14大学
対談レポート

- 東京藝術大学
- 武蔵野美術大学
- 多摩美術大学
- 女子美術大学
- 東京工芸大学
- 文星芸術大学
- 東北芸術工科大学
- 金沢美術工芸大学
- 愛知県立芸術大学
- 名古屋芸術大学
- 広島市立大学
- 京都市立芸術大学
- 京都芸術大学
- 崇城大学

NEW 大新人 図鑑 2023

インタビュー 古田 亮

513名
一挙紹介

技法講座

石膏の下地に岩絵具で描く〈後編〉山崎雷蔵

公募展便り 人展・白日会展・日本南画院展・从展・独立春季新人選抜展



川路桐耶「実家の土間」

洋画・学部



山口美和「離れても」

洋画・学部



牛島裕一郎

[natural posture or stance]

洋画・学部



福岡めぐみ「Tréfle blanc」

日本画・学部



糸数日呼「ふたり」

洋画・学部



平田健起「OC」

洋画・学部



吉原ひなの「波の音」

彫刻・修士



河南優季愛「自動車整備工場」

日本画・学部



吉村遥華「イオマンテ」

日本画・学部

Information

創立年：1949年
 2022年度学部卒業生数：62人
 2022年度大学院修了生数：10人(修士課程のみ)
 アート系学部・学科：
 [学部]芸術学部 美術学科(日本画、洋画、彫刻、芸術文化、視覚芸術)、デザイン学科(プロダクトデザイン、グラフィックデザイン、マンガ表現)
 [大学院]芸術研究科(美術、デザイン)〔博士後期課程〕芸術学
 [住所]熊本県熊本市西区池田4-22-1

崇城大学

崇城大学第20回芸術学部卒業展・第18回大学院芸術研究科修了展
[SOJO UNIVERSITY STUDENT EXHIBITION 2023]
会期 ● 2月21日～2月26日 会場 ● 熊本県立美術館 分館



古川久仁美「緩やかな部屋」

日本画・修士



大橋安佳里「帰路」

日本画・修士



池田絵菜「冬風に揺れる」

日本画・修士



荒木瑠奈「祈り」

洋画・修士



荒木沙妃

「僕と魔法と秘密の部屋」

洋画・修士



西田佳世「Burn into」

洋画・修士

▲ 池田絵菜さんは背景の棚に収まった使用感のある靴や本、床の木目の描写など、画面作りの徹底したこだわりに好感を持ちました。二人の少女の表情の違いも、感情の機微を繊細に表しているようです。大橋安佳里さんは交通標識や鳩たちで画面にリズムを作る構成力が魅力だと思います。遠くに抜けるブルーの諧調が心地良いですね。

● 私が注目したのは古川久仁美さん。日本画らしいマチエールを生かしつつ、蛍光色に近いピンクや緑も使って実験的な表現を試みられています。その上で人物の存在感がしっかりと立っているのが良いと思います。

● 西田佳世さんは日展に入選歴があり、写実的な表現にすでに定評がありますね。修了制作でも一つ一つのモチーフを真直に描いていて、これからは楽しみです。荒木沙妃さんは幻想的な作風ですが、油絵らしい重厚感を持ち味だと思います。のびやかなタッチと落ち着いたトーンの色彩でまとめられていて、深みがある。卒業制作の時点で完成度が高かったのですが、さらに密度が増したように思います。荒木瑠奈さんは色彩感覚が優れた点描の表現はもちろんですが、明暗の使い方が効果的で、より人物の表情が生きていると思います。牛島裕一郎さんもコントラストが効いてドラマチックですね。

● 水辺を歩く足下をクロースアップする構図のとり方に、アニメーション作品で巨大なメカが歩行するシーンの1カットのような雰囲気も感じました。山口美和さんはコロナ禍で会えない家族や友達と会話する「Face Time」の画面をコマ割りして描いた作品で、明るい気持ちになりますね。ちょっとおとけたようなお父さんが特に良い味を出していて、微笑ましいな(笑)。

● 毎年崇城大学は身近な人を主題にストレートに描く学生がいる印象があります。川路桐耶さんの作品も実家の玄関の風景という点で、ノスタルジックな光景ですね。やわらかい自然光が差し込む描写が上手いと思いました。対照的に平田健起さんは少女のキャラクターを描いた作品ですね。

● このような画風で大画面に描くと、選択にセンスが問われますが、洒脱で完成度が高い作品だと思います。

▲ 糸数日呼さんは意図的にタッチの細かさを変えた作品です。かなりの色数を使いながらも画面にまとまりがあって、空間の扱い方もよく練られています。福岡めぐみさんも絵具の表情の変化や絵肌の作り方に見所がありますね。吉村遥華さんの作品は熊の霊を神々の世界へ帰すアイヌの儀礼を主題としている。金あるいは黄土と黒を基調にした画面は、ヒグマの凍と眼差しも相まって厳かな雰囲気があります。

● 河南優季愛さんの雑多な工場を描いた作品は、絵具を洗い出したようなマチエールが独特で印象に残りました。力強い縦方向のストロークも味があって良いですね。

▲ 最後に彫刻で注目したのはダイナミックな人体表現の吉原ひなのさん。かなりチャレンジングなポーズの構成ですが、その複雑な動静を捉えようと試みた意欲作だと思います。



田中真季

たなか・まき 1989年熊本県生まれ。崇城大学芸術学部洋画コース卒業。白日会準会員。第97回白日会展白日賞・梅田画廊賞。①Edgar Degas。②本：伊坂幸太郎『小説の惑星』。

娘を描く時、構図や形を考える時は、一緒に遊んだり、たくさん抱きしめたり時間を過ごすことで、作品の根底の部分を探り組み立てるようにしています。世の中をバチバチに生きることが作品の材料であり、日々採集しています。



「Mid night」2022年
アクリル、油彩、キャンバス 30号F

●第34回 明日の白日会展 (8月 [予定]・日本橋高島屋S.C.)

熊谷有展「Sweet Memories」。子供を抱いた母親の姿を、少し離れた位置から逆光のシルエットによって浮かび上がらせる。

熊谷有展「Sweet Memories」



背後はガラス戸になっていて、洗濯物などの影も見える。熊谷作品特有の格子状の表現によって、どこか過去を思い起こすかのような、現実から少し離れた情景としてイメージが立ち上がる。点描でじっくりと描いていく中に、作者のイメージの結晶がふつふつと湧き立ってくるかのような面白ささえ生み出している。



田中真季「Dotenite」。細やかに筆で刻むようにして画面を描いている。右下方の少女が舞う鳥を見上げている。そして、大きくくうねるような風が画面全体に吹き荒れる。この少女にしか見えない風景だろうか、鳥が静かに輝きながら、天上世界へとこの少女を導くかのようだ。

中村晋也「母子像」。ほとんど無意識に象られ、現れたかのような雰囲気。興味が実に興味深い、母子像である。赤ん坊を抱く母の姿が頼りなくありながらも、同時に穏やかな包容力が感じられ、強い愛情のイメージを静かに訴えかけてくる。

中村晋也「母子像」



楠元香代子「恋唄」。一枚の鉄を丸めるような調子で女性の姿を造形する。そのフォルムがひらひらと風に揺らぐようで、しなやかな魅力が生まれている。かろやかで
儂い心象的造形だと思う。

楠元香代子「恋唄」



勝野眞言「翠」。かけられた釉薬が、雨に濡れたかのようなイメージを引き寄せる、女性の胸像である。物を思うような雰囲気もあるし、打ちのめされ言葉もないような感情も見え隠れする。シャープなフォルムを見せつつも柔らかかさもあって、勝野作品らしい端的な造形にやはり注目する。

勝野眞言「翠」

